

響

第68号 2011年3月10日

流



京都・鹿ヶ谷 法然院にて

物ならば

捨てられるけれども、
執着は捨てられない。

何もかも

間に合わないけれども、
自分の知恵だけは
間に合わなくても
捨てない。

それを我執と言います。

安田理深師

西光寺通信『響流』 第68号
発行日 2011(平成23)年3月1日
発行者 真宗大谷派(本山/京都・東本願寺)
西光寺 住職 藤石哲朗(法名釋徹舟)
〒110-0015 東京都台東区東上野 6-15-6
Tel. 03-3841-3229
Fax 03-5828-4495
E-Mail saikoji@xvh.biglobe.ne.jp

はるのひがんえほうよう 春の彼岸会法要

暖冬といわれていた長期予報でしたが、東京では2回も雪が降る寒い日が続いた今年の冬でした。

今年になつてからもニュージーランドでの大きな地震、幼い子どもの殺人、中東での内戦で人間が人間を殺し合うという胸の痛むことが報道されない日がないような連続です。

平和を求めていながら殺し合いをしてしまう人間世界の闇を深く思います。

いよいよ何をよりどころに生きるのかをはっきりしなくてはならない時代を迎えているのだと思います。

3月18日(金)から24日(木)まで春のお彼岸を迎えます。彼

岸は Paramita というサンスクリット語が「波羅蜜多」と音写され、意味で到彼岸^ニと訳されました。迷いの此岸(我々の世界)から覺りの彼岸に到る、という意味です。浄土三部經の一つ『仏説觀無量壽經』

に「日想觀」によつて西方浄土を觀ずるのには、太陽が真西に沈むときがもっとも良いとされ、そのときにあたる春分・秋分にこの信仰が結びついて日本で定着した仏教行事となりました。そして、具体的な六つの実践行(六波羅蜜)が伝わっています。①布施、執着を離れ、施しの行をする。②持戒、仏の教えに従い、正しい行為をする。③忍辱、苦から逃げず、現実に立つ。④精進、できることを精一杯努め励む。

⑤禪定、乱れる心を鎮め、平穩な心を持つ。⑥智慧、真理に目覺め、正しい道理に従う。ところが、親鸞聖人の曾孫・覚如上人は「二季の彼岸をもつて念仏修行の時節と定むる、いわれなき事」と記して、日時を限定して仏道に志す事は特別な行事として大切にしているように見えるが、「他力の安心」ではないと批判されています。

それは、「いつでも、どこでも、だれにでも」という大乘の根本から外れているというのです。「いつでも、どこでも」同じ心の構えでいなければ「他力の安心」(念仏の教え)ではないわけです。

親鸞聖人は彼岸を浄土と仰ぎ、私たちの人生のよりどころであり、また、真に帰るべき処であると言われています。

安樂浄土にいたるひと 五濁悪世にかえりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきわもなき

親鸞 浄土和讃

私たちの帰るべき処は、阿弥陀如来の浄土であり、その浄土をよりどころとして、今を生きる場が此岸とうなずかされてきます。浄土の光に照らされて、浄土を真実の宗として、今、此岸を生きる力があたえられる。それが南無阿弥陀仏のはたらきであります。

亡き人を縁として、「どこまでも、あなたの『いのち』の一大事に目覚めよ」と呼びかけられているのがお念仏の世界であります。亡き人が彼岸の浄土を開く「諸仏」として拝まれるとき、亡き人のいのちは、今、私のいのちとなってここに生きています。亡き人を案ずる私、亡き人から案じられている私だったのです。つまり、彼岸は亡き人を縁にして、この私がお念仏に出遇う尊い場だったのです。諸行無常の人生、煩惱にまみれた人生をご縁にして、共に阿弥陀如来の浄土へ生まれて行く(往生)ことを願う道が真宗門徒の道であります。

先祖供養にとどまらず、亡き人を偲びつつ、限定された「彼岸」を縁として「いつでも、どこでも」が成り立つ世界が開かれるよう、その願いの声を聞き取って念仏申す身となり、そして日々の生活をとおして「法」(道理)を聞き、「彼岸」を求める歩みとしたいものです。

3月21日(春分の日) 午前11時から
西光寺本堂にて
「正信偈 同朋奉賛」のおつとめと
住職のおはなし

光明土海一味

昨年から相次いで葬儀に関する本が多く出されていることは皆様もよく存じている事でしょう。島田裕巳氏の『お葬式は、要らない』をはじめ、一条真也氏『お葬式は必要』等々がありました。お葬式を縁にして多くの方と仏法のお話しをさせていただいている身ですから、看過できない問題でもあります。

島田氏の『お葬式は、要らない』を読みました。葬式不要論を全面的に展開している訳ではないようですが、私の読解力がたりないのか、一体何を言いたいのか理解できませんでした。民俗学・歴史学・宗教関連の諸論を引用しながら、日本人の祖霊信仰、葬儀の歴史、仏教のあり方、諸外国の葬礼まで、総花論的にタイトルが示しているようなセンサーショナルな形で軽薄な論を展開しているようにみえます。葬儀を通じて日本人が伝承してきた、先祖や供養に対する民族の心意までの深い考察はなされていないのではないのでしょうか。

お決まりの「葬式仏教」であり、（真宗では言いませんが）戒名という不透明な実態に見られる経済論的視点から葬式が要らないと述べられているにすぎないようにしか読めませんでした。



島田氏によれば「日本の葬儀費用は231万円と世界一高額」と述べているが、根拠になったのは2007年財団法人日本消費者協会の

アンケート調査のことです。諸外国は1990年代前半の資料ですの
で15年の時代差と為替レート及び各国の慣習や習慣を一切無視し
て、乱暴に同列上に金額だけを論じている点にたいへん違和感を憶え
ました。

また、売らんかなの出版社の思惑も含めオウムのときの裏表のよう
な姿勢に見え、恣意的な意図があるのではないかと言わざるを得ませ
ん。くわえてお葬式では会葬者からの香典等が葬儀費用に充当されて
いる現実には全く言及されていません。「村八分」というのは、火事
と葬儀だけは別だというところからきている言葉があるように相互
扶助という理念が、敢えて言わなくても共有されてきた社会だつ
たのです。宗教学者ならば当然理解しているはずなのですが。

たしかに、これまで地域社会が崩壊し、何でも金で解決するのが面
倒がなくてよいという風潮が急速に広まり、近頃では湯灌すら業者任
せということも珍しくないという事です。そんな中、一時派手になつ
ていった葬儀の反動と、バブル経済崩壊からリーマンショック以降急
速に家族だけで、また火葬するだけの「直葬」が増えてきました。

背景として法を説かず、「供養」をすることを金銭的な事だけに矮
小化してきた一部の仏教者の責任は当然とし、また昔からの葬儀屋さ
んではなく、これからはシルバー産業が儲かると安易に参入してきた
心ない業者の不透明な経費への不信感もその背景には横たわってい
ます。が、それらをすべて一緒にして論を組み立てるやり方は乱暴と
言わざるを得ません。

通夜・葬儀は大切な儀式です。ただお別れをしているのではなく、
人間として生まれ、そして亡くなっていかけたという事実を通して私
たち生きている者がどう受け止めるのかが問われる場なのです。個人

の意思も、残された方の願いも、思いも大切です。しかし、亡くなっていく存在を今生きているという事実をどう受け止めていくのか、亡き方から、また人知を超えた世界からの問われているのです。そうした呼びかけに気づくという事が葬儀の大事な意味だと思っています。

本著が話題になってから、別の対談で「葬式は、要らないのではなく、意味のある葬式推進論であると述べています。私たち僧侶は本当に意味のある葬儀を行ってきたのか、と振り返る必要はあります。の葬儀は念仏相続の仏事です」と言う事をどれだけ伝える努力をしてきたか自問自答せずにおれません。

至らない事だらけですが、枕経には必ず伺い、お通夜でその方との出会いを振り返りながら、通り一遍でない法話を心がけてきましたし、茶毘にふした後、蓮如上人の「白骨のお文」の現代訳を共に拝読しながらお話をさせていただいてきました。一番重要な通過儀礼と考えられる場において、親族はじめ参詣者と共に、日本人の霊性の歴史的背景をも含めた、感動と感銘を共有できる葬儀を、無縁社会といわれる現代に訴える儀式を回復・創造していきたいと願っています。

2月6日の読売新聞「日曜の朝に」に次のような記事がありました。

八十代のそのおばあちゃんは都内のお寺によく通っていた。そのお寺の坊守さんとおしゃべりをするのを楽しみにしていた。夫と離婚し、一人で子どもを育てた。子どもたちとも訳あって付き合いを断っていた。おばあちゃんが自宅で亡くなっているのが見つかり、知らせを受

けてお寺で葬式を行った。お葬式の後娘さんがお寺を訪ねてきた。生前の母がどんな話をしてきたか坊守さんに尋ねた。「母は幸せだったのですね」。娘さんは泣き崩れた。母と断絶していた自分自身を責め、悔やんでいるようだった。親しくしているお寺で、先日聞いた話だ。

お葬式の簡素化が叫ばれて久しい。最近では「直葬」が増えていると聞く。ただ、あまりにも簡素化した葬送はあとで取り返しのつかない事になりはしないかと私は気になってしまふ。直送でよしとしていた遺族でも、気持ちに変化があつて、個人を偲びたいと思つたとき、手がかりとなるものが何もないことになりはしないか。娘さんはお葬式をきっかけに、自分の知らない母をたどる試みを始めた。命のつながりの大切さを今、噛み締めているという。もしおばあちゃんがお寺に通っていないければ！。個人を偲ぶよすがについて考えさせられた。



「これからの行事

ご家族を異国で亡くされ、かの地での葬儀に行けなかったあるご門徒さんのお話を聞かせていただいた事があります。つらく悲しい出来事であるけれども、お葬式に行かれなかった事で身近で送る事ができず、それによって、本当におこった事なのかと、亡くなった事が今でも実感できないでいる。その事がもつとも悲しいとおっしゃられました。

ある調査で、お寺に期待する事はなにか、との問いに8割以上が説教を聞きたいと答えたとあります。その次が読経でこの二つは坊さんの基本です。コンサートなどの催し物も多少回答にありましたが、少数でした。

本来の意味での「葬式仏教」を機能させなければならぬ。そのためには機能させるための活動を、坊さんでなければできない日頃から行っていかなければと、切に感じた事でありませう。



西光寺 聞法会

4月16日(土) 午後3時から

歎異抄とゆつくり読んでいます。またどなたでもいつからでも参加できます。

会費500円

ご遠忌団体参拝 説明会

5月5日(祝) 午後3時から 於 長泉寺

宗祖親鸞聖人750回ご遠忌団体参拝に行かれる方対象の合同説明会を行います。

西光寺春の法要 「永代経」

西光寺にご縁のあるすべての方の合同法要です。必ずお参りください。

法要開始 午前11時から